

## 第2部 「制度を生きる人々」 各論

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/9863">http://hdl.handle.net/10232/9863</a>

## 第 2 部

### 「制度を生きる人々」各論

第二部は、各発表者の個別論文を掲載する。これらの論文は、当日の報告内容にもとづきながら、コメンテーターや参加者の貴重なご意見をできるかぎりフィードバックさせ、発表原稿を加筆修正する形で作成されたものである。5名の論文の要旨は以下のとおりである。川中は法制度に焦点を当て、財政的資源分配の決定過程、つまり予算過程を分析することによってフィリピン政治権力の実像を描くことを試みた。長坂は、マニラ首都圏における紙器産業が特定の地方出身者で占められている事実に注目し、家族・親族制度と特定産業の発展という観点から従来の移住者ネットワークに関する議論を批判的に検討した。川田は、セブのラジオ局をテーマに取り上げ、放送規制をもたらす組織的要因に対してラジオリスナーが、まったく自発的・能動的に、かつ無制限に制度的枠組や構造を改編していく主体ではなく、「期せずして」日常の微細な活動のなかで実践していく様相を、補完的制度としてのラジオ局、仮想共同体の構築、生活知識の形成などの側面から考察した。鈴木は1898年に始まる米国によるフィリピン植民地統治を対象として、ミンダナオ島の制度的支配に対しムスリムとしての「モロ」がどのように主体的に対応したのかについて、植民地状況という不均衡な力関係を前提に論じた。西村は、土地無し農業労働や零細農の貧困再生産構造を土地制度や雇用制度の運用に焦点をあてることによって明らかにした。また、生活向上戦略について諸制度の相互連関関係の重要性について考察した。以上のように、第二部では、「制度を生きる人々」という主題に対して、各発表者の研究領域からアプローチを試みた。